

やくそくの愛——もくじ

新しい出発	7
思案	17
新しい学校	20
アーニー	22
ワンドの訪問	29
ラーソン夫人を訪ねて	36
うれしい知らせ	44
ワンドの赤ちゃん	50
ラーソン夫人の死	59
はかりごと	61
祈りの応え	70
ナンドリーとクリー	81
町へ	89
家族として	101
新しい先生	106
学校がはじまって	113
学校で	120
目新しい出来事	122

トミーの友だち
牧師を捜し求めて
マーとの話し合い
ワンダを訪ねて
新しい牧師
トミー
学校での出来事
オワティカ
決めかねて
オワティカとマー
新しい牧師の到着
家出
時が流れて
レット
教会堂
家族
ナンドリー
クリスマスの喜び

206 203 198 192 189 187 184 180 176 173 169 165 161 158 152 145 140 131

クリスマス晩餐	212
やり直し	218
ジョシュとナンドリー	223
ジョウ牧師	233
新しい家	236
日々の暮らし	239
痛い目にあつて	243
あのウイリー	248
ミッシーのお相手	253
心乱れて	258
もう一つのクリスマス	264
喜びの春	268
ウイリーの帰還	272
エレンのミシン	276
特別な日	280
訳者あとがき	284

愛をこめてエドワードに、そして

テリー、レイヴオン、ローン、ローレル——私の素晴らしい家族にささげる。

新しい出発

マーティは深い眠りからのがれようと、何度も寝返りをうった。恐ろしい夢に体中の震えを止めることができなかつた。少しずつ目が覚めてくるにつれ、（ああ、自分はいまベッドの中にいて、しかも守られているのだ）とわかつて、安堵感あんどが体全体に広がっていった。

それでもまだ不安は消えなかつた。あまりにもリアルでこわい、恐ろしい夢を見たせいだ。もう何年もたっているのに、どうしてこんなにも真に迫った夢を見たのだろう。

思いだすだけで、いま見た夢の恐ろしさが迫ってくるのを感じるほどだった。あの壊れた幌馬車、荒れ狂う吹雪に引き裂かれ、バタバタと音をたてている幌。片隅でマーティはたったひとりで、薄く破れた毛布を身にまとい、寒さに震えていた。ひとりぼっちなのだという絶望感は、その凍えるような寒さよりも彼女を苦しめていた。

（わたしは、死んでしまう）マーティは思った。（たったひとりつきりで、わたしは死んでしまうんだわ……）ありがたいことにそこで目が覚めた。ベッドは暖かく、部屋の窓から眺める夜空には星が美しく輝いていた。

マーティがそれでもまだ体の震えをおさえることができずにいると、たくましい腕が彼女を引き寄せ、しっかりと抱きしめてくれた。クラークを起こすつもりはなかつたのに。

このところとても仕事が忙しかったから、彼には充分な睡眠が必要だとわかっていた。窓から差しこむ薄明かりの中だろうかがっていると、クラークはまだ本当に目覚めてはいないようだった。

彼へのあふれるような愛で胸がいっぱいになった。マーティがクラークを必要としている時は、たとえ眠りの中からでさえ、いつでも彼女を支えてくれた。目覚める前からマーティの必要を感じとり、しっかりと抱きしめてくれたのは、これが初めてではなかった。

目を覚ましたクラークは、彼女の長い髪に口づけしてささやいた。

「どうかした？」

「いいえ、なんでもないの」マーティは答えた。

「ただ、とてもこわい夢を見たの、それだけよ。わたし、ひとりぼっちで……」
クラークは抱きしめていた腕に力を込めた。

「もう、君はひとりつきりじゃない」

「そうねクラーク、よかった。わたしうれい……とつても」

クラークの腕の中になると、いつしか震えもおさまり、あの夢の真実味もしだいに薄れていった。

マーティは彼の頬にそうと手を伸ばした。

「わたし、もう大丈夫、本当よ。だからもう一度休んで」

マーティの髪をなでていたクラークの手は、ゆっくりと肩に落ちていった。しばらくマーティが身動きせず横になっていると、クラークは寝息をたて、また眠りについたようだった。

いまはもうすっかり落ち着いて、あの恐ろしい夢を頭から追いだしていた。そしてきょう一日の仕

事をどうこなしていこうかと考えながら、この静かな時を過ぎそうと思つた。

冬のあいだ地域の男たちは何カ月も、自分たちの仕事のかたわらでできる限り時間をとつて木の伐採ばっさいや運びだしをした。彼らも、そして奥さんたちも、この地域に学校が必要だと強く感じた。自分たちの子どもに教育を受けさせるただ一つの方法は、自分たちで学校を建てあげることだと思つていた。

教室はたった一つというそまつなものだったが、デイベイス家が提供した小川のほとりの土地に、新しい学校を建てることになつていた。

少しづつ丸太が山になつて積みあがつていった。春の種まきの前に必要なだけの丸太を用意できれば、畑くわに鋤くわを入れる前に少し時間をさいて組みあげることができるだろうと、みんなは精をだした。

丸太の数が数えられ、必要な数が揃い、そしてあすはいよいよ「学校の棟上げ」の日となつた。男たちは一日で壁の部分而建てあげ、できれば垂木たなぎまで組みあげるつもりだった。そうすれば、あとは時間を見つけて作業し、夏のあいだに建物を完成することができる。そして秋までには、子どもたちは自分たちの学校が持てるようになるだろう。

マーティはその先のこと、先生のことを考えた。まだ先生が見つからず、しかも捜すのは容易ではなかつた。学校ができあがつても、資格のある先生がいまいちということになつてしまふのだろうか？ いいえ、みんなで祈らなければ、祈つてこの地域の必要が満たされるようにしなければ。力を合せて造りあげた学校が無駄にならないで、ふさわしい先生が与えられるようにと。

初めの学期に、ミッシーは加わらないことにしていた。十一月になつてやっと五歳になるので、他の子どもたちといっしょに新しい学校に通うにはまだ幼すぎた。マーティの心は複雑だった。あと一

年はミッシーを家に置いておきたかった。それでも新しい学校のこと、周り中がこれほど興奮していることを思えば、あの子を学校に行かせないようするのは至難のわざだった。マーティはクラークと話し合つて、ミッシーを今学期は学校に行かせないことにすでに決めていたが、ミッシーがひっきりなしに学校のことを話しているのを思うと、この決断はとても辛かった。

初めの頃は、学校のこととはまだまだ先の話だと思つていたのに、いまではまさにその「誕生」は目の前のことになつていた。それを思うと興奮して、体を休めなければならぬのはわかつていても、とても寝てはいられなかつた。そうかといつて、仕事をはじめするにはあまりにも早すぎた。彼女が動きまわれば、家族のみんなを起こしてしまうだろうから。

マーティは静かに横になつたまま、あすの食事に何を持つていこうか、そのためにきょうは何を準備したらいいか考えた。頭の中で、二人の子どもたちにあす何を着せようか、また仕事の合間にだれとおしゃべりしようかなどと思ひ描いていた。

時はいつこうに進まず、落ち着かなくなつたマーティは、ついにベッドからそうつと抜けだすと、静かに注意深く立ちあがつた。おなかの赤ちゃんがじゃまをして、思うように素早く動くことができなかつた。

（あと、一カ月よ）マーティは自分に言つて聞かせた。（そうすれば、男の子か女の子かがわかるわ）ミッシーは妹を欲しがつたが、クレアは気にしていなかつた。幼い少年の心のうちでは、赤ちゃんは赤ちゃんだった。しかも赤ちゃんはいつも家の中にいるのだから、自分はいつだつて父さんと出かけられると思つていた。そういうわけで、自分の世界に赤ちゃんが入り込んでくることは、クレアに

は考えられなかった。

マーティは室内ばきを履き、暖かいローブをはおった。朝は家中が冷えきっていた。

まず眠っているミッシーとクレアの様子を見にいくと、まだ薄暗くてよく見えなかったが窓から差しこむ明かりで、二人ともちゃんと布団をかけ、気持ちよさそうに眠っているのがわかった。

それから台所に行くと、できるだけ静かに古いストーブに火をおこした。この頼りになるストーブに、マーティはまるで肉親のような親しみを覚えていた。きつと男の人も、馬車を引いてくれる馬にこれと同じような気持ちを持っているのだろう。このストーブとともに働いて、家に暖かさを、家族に暮らしをもたらしてきたのだから。家中でこのストーブこそが本当に自分だけのものだという気がしていた。

やがて火が音をたてて燃えはじめたので、ヤカンをかけ、お湯を沸かし、それからコーヒーポットをストーブの上に置いた。台所が暖まり、コーヒーが沸くまでしばらくあるので、マーティは寒くないようにローブをしつかりと身につけ、柵からクラークの古い聖書を取ってきた。みんなが起きだす前に聖書を読んで祈る時間が持てるだろう。

今朝は特別に神さまを身近に感じていた。どんなにたくさん感謝することがあるか今朝の夢によってあらためて気づかされ、そして新しい学校のことについても、さらに守られている幸せを知るのだった。神さまだけが、マーティの心の奥底を本当に理解してくださり、すべてを神さまの前にさらけ出すことのできる恵みを感じていた。

マーティは座って熱いコーヒーを飲み、その暖かさが体中にしみわたっていくのをしみじみと味わ

った。いまは精神的にも肉体的にもさわやかになっていた。この時のために特別に用意されたと思える聖書のことばを、もう一度読んだ。

「強くあれ、雄々しくあれ。恐れてはならない、おののいてはならない。あなたの神である主が、あなたの行くところどこにでも共にある」

この聖書のことばは、あの恐ろしい夢を見た今朝のマーティにとって、またとない慰めであり、約束でもあった。そしてこのことばは、いつまでも心から離れなかった。自分がひとりぼっちではないと思うと、感謝の気持ちでいっぱいになった。クレムの死んだあと、あんなにもすぐに自分をクラークのもとに導いてくださった父なる神の賢明さに、あらためて頭の下がる思いだった。マーティの心の痛みが充分にいやされ、他の人に思いを向けることができるようになった時、すでにそこにクラークがいて、彼女を心から迎え入れてくれたことを、いまでは充分理解していた。どうしてあの時、神さまの用意されたことに全身全霊で刃向かったのだろうか？ マー・グラハムは言っていた、いやしには時が必要だって。きっとあの時はまだ時間が足りなかったのだろうか。いまではその時間も与えられ、また人を愛することができるのだから。

人を愛し、また愛されること、他の人に属し、その人の生活の一部となることは、なんて素晴らしい神のご計画だろうか。自分のこの思いをクラークに伝えることができたのだろうか？ なんとかこゝとばで表現しようとしても、少しもしっくりこない。そう、ことばにだして言ってみただけれど、気持ちを充分に伝えられていない気がした。その代わり、目で、行動で伝えようとした。彼女のすべて、あらゆる面でクラークに応えようとした。

マーティの中の小さなのちが突然動きだした。

（そして、あなたが……）マーティはささやいた。

（わたしたちの愛の証よ。あなたを身ごもったことだけでなく、あなたを産んで育てること、それも愛なの。あなたは特別な。いいこと、あなたがどんな子かまだわからなくても、わたしたちの子だから特別なよ。神さまがあなたを与えてくださって、あなたが体も心も、そして魂も強い子になるよう祝福してくださいわ。まっすぐに大きく育つてね。父さんを喜ばせてあげて。そうすれば父さんはあなたを誇りに思ってくれるわ。いつまでも美しく、強い子でいてちょうだい。たとえ体が弱く、頭がよくなくても、心のまっすぐな子になって。それが父さんにとっていちばん大切なことなの。そして母さんにもね）

寝室から聞こえる物音に、マーティはまだ生まれぬわが子への語りかけをやめた。やがてクラークが台所にやって来た。

「早起きのね」笑顔で迎えながらマーティは言った。「あなたも眠れなかったの？」

「そのコーヒーの薫りが漂ってくるのに、寝てなんかいられないよ。世の中の女が男をつかまえないと思つたら、パリの香水なんかじゃなくて、入れたてのコーヒーの薫りを身につけるべきだね。そうすりゃ、ものになる」

マーティは笑って椅子から立ちあがった。

「座ってなさい」クラークは彼女の肩に手を置いて言った。

「カップがどこにあるかぐらいわかっているさ。朝の仕事の前にコーヒーにありつけるなんて、めつた

にないことだからね。いつそのこと、これを習慣にしたらどうだい」

クラークはコーヒーを入れたカップを手にして戻ってくると、マーティの向かい側の椅子に腰を下ろし、愛に満ちた、心配そうな眼差しで彼女を見つめた。

「大丈夫かい？」

「ええ」

「息子は行儀よくしてる？」

マーティはニコツとして、「あなたが来るまで、ここに座って娘と話していたのよ」

「女の子、かな？」

「ミッシーに言わせると、女の子以外はありえないって」

「明け方のこと、ちよつと気になってね」

「なんでもないの、ばかげた夢のせいよ」

「話してみたら？」

「言うほどのことでもないのよ。たったひとりぼっちになった時の、あのこわさがたまらなかったの。うまく言えないんだけど。でもクラーク、わたしひとりぼっちにならずにすんで本当によかった、クレムが死んだあのあとに……。わたしの人生の中に、すぐあなたとミッシーが入ってきてくれて。もちろん、しばらくのあいだあなたを受け入れなかったのはわかってる。それでもあなたはそこにいてくれたわ。そしてミッシーがいたから、面倒をみなければならなかったし。本当によかったわ、クラーク。わたしに考えるゆとりも与えず、立ち入ってくださいって、すべてを決めてくださった紳さまに

心から感謝しているの」

クラークは手を伸ばすとマーティの頬にふれた。

「僕も、よかったと思ってるよ、デビース夫人」

からかっているような、同時に愛に満ちた目をして言った。

「こんなにうまいコーヒーを入れてくれる女性に、会ったことはなかったからね」

マーティはふざけて手を払いのけながら言った。

「コーヒーですって、ふん」

クラークは少し真剣な眼差しになった。

「どうやら僕は、最初一杯のコーヒーを飲む前に君のとりこになっていたようだ。壊れた幌馬車に向かつて歩いていった君が、どんなにか弱く、孤独に見えたことか。心の中では死んでしまいたいと思っているだろうに、必死で背筋を伸ばして歩いてきたあの時の君を、決して忘れることはないだろうよ。僕も心の中で君といっしょに泣いていたんだ。君の気持ちを理解できる者は、僕より他にいないって思ってた。なんとかして君の痛みをやわらげてあげたいと心から願ってたんだ」

マーティは涙をふり払った。

「あなたは、いままで一度もそんなこと言わなかったわ。ただ小さなミッシーの面倒をみてくれる人が必要なだけだと思っていたのに」

「そういう女性が必要だったのは確かだったし、君がそう考えるにちがいないとも思った。初めの何カ月かは、自分にもそう言って聞かせていた。でも僕の中にそれ以上の感情があるのを認めないわけ

にはいかなくなつた」

マーティはクラークの手を取ると握りしめた。

「悪い人」暖かく愛に満ちた声で言った。

「やがて君は立ち直つて、僕を生涯でいちばんみじめな日々を追いやつた。君は僕のことを思つてくれているんだろうかとか、荷造りしてこの家を出ていってしまふんじゃないだろうか。考えてみると、あの当時はいままでもないほど祈ることを学んだような気がするよ。そして、待つこともね」

「ああ、クラーク、わたしちつとも知らなかつた」

マーティはクラークの手に口づけした。

「わたしにできるのは、いまあなたにその償いをするだけらしいわ」

クラークは椅子から立ちあがると体をかがめ、彼女の額にキスして言った。

「いいのかい、君をこき使うかもしれないよ。まず手始めに、今夜は僕の好きなシチューを作つてくれるってのはどうだい？ 具のたくさん入つた、こつてりしたやつをね」

マーティは鼻にしわを寄せた。

「男の人つて、胃袋を満たすことだけが愛の証だと思つてゐるんだから」

クラークはマーティのまだ結つていない髪をクシャクシャにした。

「さてと、仕事に出かけたほうがよさそうだ。さもないと、牛が自分たちのことを忘れちまつたと思つたろうからね」

クラークはマーティの鼻の頭にキスをして、そして出ていった。

思案

次の朝、朝日が山の向こうに顔をだすと、冬の残り雪の上や白く雪化粧したモミの木の上に素晴らしい一日を約束するように、薄いピンクや黄金色の光を投げかけていた。寝室を出ながら、マーティは心の中で感謝の祈りをささげた。きょうの学校の棟上げ式が、また春の嵐に悩まされるのではないかと恐れていたのだが、願っていたとおりの晴天に恵まれ、神さまの善意を少しでも疑ったことをわびながら台所へと急いだ。

クラークはすでに朝の家畜の世話をしに出かけ、彼がおこしていつてくれた火で部屋中が暖かくなっていた。マーティは急いで朝食の用意をした。

ストーブのところでスープをかき混ぜ、トーストを焼いていると、眠たそうな目をしたクレアが起きてきた。シャツははみだし、胸当てズボンの肩かけはねじれ、しかもさかさまにかけてあった。靴を片方だけ履いていたが、まだひもも結ばず、もう片方を脇に抱えていた。

「とうさんは？」

モシャモシャの髪をした幼い息子を見て、マーティは笑みを浮かべて

「家畜の世話よ」と答えた。

「もうそろそろ終わる頃だわ。今朝は急がないと手伝えなくなるわよ。いらっしやい、手伝ってあげ

るから」マーティはシャツを中に入れ、ズボン吊りをきちんとかけると、クレアを椅子に座らせ、靴を履かせた。

「きょうなの？」クレアがたずねた。

「ええ、そうよ。夕方までにはわたしたちの学校ができあがるわ」

クレアはしばらく考えていた。自分は学校が好きかどうかよくわからなかったが、みんながえらく騒いでいるのを見ると、きつと素晴らしいものにちがいないと思つて、ニコツとした。

「ほく、いそがなきや」椅子からすべり下りながらクレアが言った。

「とうさんが、待つてる」

マーティは微笑んだ。〈そうね、父さんは待つてるわ〉と心の中でささやいた。〈餌えさをやる時あなたがじゃまをして、あなたには大きすぎるミルクの缶を運ぶと言ひ張つて、牧場に牛を連れ戻すのになたに歩調を合わせてゆつくり歩かなきゃならないのを、待つてるわ。それから仕事をしているあいだ中、ひつきりなしにあなたが話しかけてくるのをね〉マーティは首を振りながらもまだ笑顔を消さなかつた。〈そうよ、父さんにはあなたが必要なの。あなたの父さんを崇拜する気持ちと、あなたの愛が〉マーティはクレアに厚手のコートを着せ、手にミトンをはめ、帽子をかぶらせると、ドアを開けて送りだしてやつた。クレアは父さんを捜しに元気よく飛びだしていった。

マーティはふたたび朝食の用意に戻つた。ミッシーに声をかけなければ。彼女はお寝ほうさんで、クレアのようにきょう一日がどんな日になるのか楽しみにして、ベッドから飛び起きるようなことはしなかつた。もちろんミッシーも冒険は大好きだったが、朝早くなくてもいつこうにかまわなかつた。

マーティはミッシーを心から愛していた。ミッシーはすでに充分手伝いができるようになっていたし、生まれてくる「小さな妹」のために一生懸命手助けをしてくれていた。

早めの朝食をテーブルに並べながら、近所の奥さんたちも新しい学校に思いをはせながら、いま頃こうして台所を動きまわっているのだろうと思った。家族が新しい農地を開拓するからといって、その子どもたちが教育を受けずに育たなければならぬ理由は一つもない。教育を受けて育ち、本人にその気があればこの地域で、あるいは他の地域で役立つことだってできるようになる。

マーティはラーソン家の二人の少女のことを考えた。ジェッドは新しい学校の必要性をまったく認めず、彼に言わせると「単なるばかげた考えで、どのみち娘には教育はいらない」ということだった。しかしラーソン夫人の目は、自分の娘たちにも正当な機会を与えたいと訴えていた。二人はもう十三歳と十一歳になっていたから、いまこそ教育の必要な時期であった。

台所で働きながら、マーティはジェッドが気持ちを変えてくれるように祈った。

祈りの途中、台所の窓から外を眺めていると、家の「男ども」が納屋から出てくるのが見えた。クラークはいつもの大きな歩調を、幼いクレアの小さなチヨコチヨコした歩みに合わせていた。ミルクの入ったバケツの取っ手にぶら下がり、自分では手伝って運んでいるつもり of クレアは、歩きながら一生懸命クラークに話しかけていた。犬のオール・ポプは、まるで自分が先導しなければ二人とも決して家に帰りつけないとも言わんばかりに、彼らの前を跳ねまわりながらこちらに向かっていた。

マーティは胸がいっぱいになった。愛は時には痛みをとまなうが、ああ、これはなんて素晴らしい痛みだろうか。